氏名	川合　真木子
ヨミガナ	カワイ　マキコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第523号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉　アルテミジア・ジェンティレスキのナポリ時代：後期画業の展開と特質 〈作品〉 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	越川倫明
（論文第１副査）			()	
（作品第１副査）			()	
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	田辺　幹之助
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	佐藤　直樹
（副査）	日本大学	教授	()	木村　三郎
（副査）	神戸大学大学院	教授	()	宮下　規久朗
（副査）			()	
（副査）			()	
（副査）			()	

（論文内容の要旨）

本論文では、17世紀イタリアの女性画家、アルテミジア・ジェンティレスキ（1593年－1654年以降）の後期画業について論じた。ピサ出身の画家オラツィオ・ジェンティレスキの娘としてローマに生まれた彼女は、フィレンツェ、ヴェネツィアでなどで活躍し、1630年以降ナポリを本拠地とした。
ロベルト・ロンギ（1916年）以来、彼女の作品は主にカラヴァッジェスキ研究の文脈において取り上げられ、カラヴァッジズムへの反応が強く見られる前半生の画業に興味が向けられることが多かった。また、アルテミジアの前半生はそれ自体が波乱万丈であり、彼女が十代後半に巻き込まれた強姦事件とその裁判のエピソードは、今なお衆目を集めている。さらに、20世紀におけるアルテミジアの再評価に重要な役割を果たしたフェミニズム美術史の文脈においても、画業初期に描かれた力強い女性像が高く評価される傾向があった。従って、前半生に関するものと比べて、後半生の画業に関する論考は少なく、近年ナポリ絵画研究の中で後期作品の再評価がすすんでいるとはいえ、相対的に手薄であるといわざるを得ない。このような研究状況に鑑みて、本論文は、ともすれば等閑視されがちであったアルテミジアの後期画業について可能な限り考察を深め、新たな知見を加えることを目的とするものである。

まず序論において先行研究をまとめ、問題提起を行った。女性画家として必ずしも容易ではない社会状況に直面していたアルテミジアが、ライバルの多いナポリにおいて、どのような生存戦略をとったのかという問いを、本論文の出発点とした。次に第一章では、ナポリに至るまでの彼女の画業を概観した。画家の出自やパトロネージの状況などを確認することで、これ以降に展開されるナポリ時代についての論考の導入とした。

第二章においては、アルテミジアのナポリ滞在に大きな役割を果たしたスペイン系パトロネージに着目し、1630年代の公共注文との関係を考察した。特にポッツォーリ大聖堂の内陣装飾プロジェクトを取り上げ、未刊行史料を用いながら、現在は改変されてしまった大聖堂内陣の装飾プログラムについて復元的

に論じ、内陣におけるアルテミジアの作品の位置づけを明らかにした。さらに図像学的な分析を通して、アルテミジアの《円形闘技場の聖ヤヌアリウス》（1635－1637年頃、ポッツォーリ、大聖堂）が、大国スペインを介したポッツォーリとナポリという二都市間の政治的関係を反映した作品であることを示した。
第三章においては、ジェシー・ロッカーによる最新の論考（2015年）を参考にしながら、ナポリ副王の宮廷の教養サークルにおける画家たちの活動に着目し、同時代の詩歌を取り上げつつ、アカデミア・デリ・オツィオージに集う詩人たちの間で、アルテミジアがどのような評価を得ていたのかを確認した。またこれと共に、アルテミジア自身が同時代の文学的主題にどのように反応していたのかを新たに考察した。特に17世紀の文芸と関わる作品として《コリスカとサテュロス》（1630－1638年頃、個人蔵）を取り上げ、彼女の作品解釈の独自性を論じた。
第四章においては、《バテシバの水浴》（1641－1648年頃、ポツダム、ノイエス・パレー）をはじめとして複数描かれた女性裸体像を取り上げ、私的パトロネージの側面から考察した。書簡の読解を通して、アルテミジアが繰り返し描いた「型」としての優美な女性裸体像の制作が、いかに職業人としての彼女の生存戦略と連動していたかを示した。
第五章においては、トスカーナに一族の出自を持つアルテミジアが、フィレンツェのパトロンを中心としたトスカーナ系の人脈を巧みに利用し、ナポリでの活動を続けていたことを、画家の書簡や未刊行史料によって裏付けた。また、ナポリにおけるフィレンツェ人コミュニティと彼女の関係についても同様に検証した。この結果、未刊行史料によって、同コミュニティに属していた画家の関係者や周辺人物を特定し、アルテミジアの作品受注に介在したトスカーナ人ネットワークの一端を明らかにした。
結論において提示した本論文の新知見ないし成果は、次の通りである。まず、ナポリ時代の前半にあたる1630年代に関しては、この時期を特徴づけているスペイン系パトロネージが、従来いわれていたようにアルテミジアのナポリ移住の動機であったばかりではなく、ナポリ時代より前には見られなかった公共注文の獲得という点においても、非常に重要な役割を果たしていた可能性が高いことを指摘した。また、同時期のナポリ副王の宮廷において、彼女が持っていた一種の宮廷画家的な性格を、先行研究を紹介しながら改めて確認した。次に、ナポリ時代の後半にあたる1640年代以降については、副王をはじめとするスペイン系パトロネージの割合が小さくなり、むしろ私的なパトロネージが女性裸体像の制作と結びき、彼女の画業を支える柱となっていく様子を具体的に示した。最後に、ナポリ時代全体を通して、トスカーナ系の人脈と作品受注の関連性について検証した結果、アルテミジアの出自が、ナポリにおける画業を成立させる要件として積極的な意味を持っていた可能性を提示した。以上の通り、本論文においては、これまであまり知られてこなかったアルテミジア・ジェンティレスキのナポリ時代の諸相に光を当て、新知見を加えた。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、17世紀イタリアの女性画家アルテミジア・ジェンティレスキの後期の画業について包括的に論じた論文である。アルテミジアに関しては、初期のカラヴァッジョ的傾向の強い作品がとりわけよく知られており、レイプ事件といった個人的経験に関する伝記的関心ともあいまって、ジェンダー的視点からもしばしば論じられてきた。一方、当時スペイン領であったナポリに移住したのちの後期の画業は、相対的に研究者たちの関心をひきつけることが少なく、ようやく近年になって再評価が進みつつある分野である。本論文はこうした最近の研究動向に目を配りつつ、ナポリ時代のアルテミジアの画業の展開について、様式的・図像的考察のみならず、画家の制作活動を支えたパトロンや人脈に関しても綿密な調査を行ない、新たな知見を切り拓くことを目指したものである。
第一章では、ナポリ移住以前、ローマとフィレンツェにおけるアルテミジアの制作活動について、パトロネージの側面に焦点をおきながら概観している。特に、フィレンツェの宮廷や知的サークルとの関連について詳しく記述されており、本章の内容は、後年まで画家が保ち続けるフィレンツェ系人脈について考える上での前提をなしている。
第二章では、ナポリ時代の初期にあたる1630年代に、アルテミジアがいくつかの公的な大作の制作にたず

さわった点に注目し、こうした成功の背景をなすパトロンとの関係を分析した。この時期にアルテミジアはナポリ副王を中心とするスペイン人サークルから一定の評価を得ていたことが、様々な状況から推察される。筆者は、同時期のアルテミジアの最も重要な公的注文であるポッツォーリ大聖堂の装飾絵画連作に注目し、この連作について詳細な分析を行なった。その結果、第一の成果としては、現在では大幅に変更されてしまっている連作絵画の当初の配置を、同時代の史料に基づいて再構成に成功した。第二の成果としては、アルテミジアが制作を担当した《円形闘技場の聖ヤヌアリウス》の図像の解釈を行ない、この作品の構図的解決に当時のナポリとポッツォーリの政治的関係が色濃く反映されていることを示すことができた。

第三章では、ナポリの知的サークルとアルテミジアがどのような関係をもっていたかに関心が向けられている。このトピックは、近年アメリカの研究者ジェシー・ロッカーによって特に研究が進められた分野であるが、筆者はロッカーの研究成果を参考にしつつ、この時期の世俗主題の作品についていくつかの新たな指摘を行なった。

第四章では、副王の交代によってスペイン系パトロンの強いバックアップが期待できなくなった時期に、アルテミジアが優雅な女性裸体像を得意分野として前面に打ち出し、多くのヴァージョンを個人のパトロンたちに販売することで画家としての成功を維持していた状況が分析されている。ちなみに本章と次章では、近年公刊されたアルテミジアの書簡類が重要な材料となっており、日本ではまだほとんど紹介されていないこれらの書簡類を、筆者は積極的に翻訳して紹介した。

第五章では、ナポリ時代にも依然としてアルテミジアの職業生活を支えていたフィレンツェ系ないしトスカーナ系の人脈の問題が検討されている。もともとジェンティレスキ家はピサに出自をもつため、画家アルテミジアは自らをトスカーナ人として対外的に示すことができた。本章では、画家がナポリにおけるトスカーナ人コミュニティと密接な関係をもちながら活動していたことが、新たに発見された史料も交えて論じられている。

以上のように本論文は、すでにかなりの蓄積のあるアルテミジア・ジェンティレスキ研究に基づきながらも、相対的に研究の手薄であった後期の画業に焦点をあてて、その実態を可能な限り解明しようと試みたものである。筆者はオーソドックスな実証的史料研究、様式的・図像学的考察を基本としながらも、論文全体を通じて、当時いまだ事例の多くない女性画家であるアルテミジア・ジェンティレスキがいかにして画家として社会的に生き抜くことができたのか、という視点を保ち続けている。その結果、議論の多くの部分を、画家の活動を支えたパトロンたちとの関係や同時代の文学サークルとの交流といった側面にあてる結果となっており、その点が本論文の大きな特徴となった。いくつかの点では、古文書調査に基づいて新たな歴史史料を発見・紹介することに成功した部分もあり、これらは研究成果として高く評価することができる。

もちろん、論述のゆきとどかなかった部分、考察が十分に尽くされていない部分がないわけではなく、たとえば初期のローマ・フィレンツェ時代とナポリ時代の様式的差異の問題については、いまだ明確な知見が示されているとはいいがたい。この点は、同時代の他の画家たちからの影響関係や、パトロンの多様な趣味を考慮する必要のある複雑な問題ではあるが、アルテミジア・ジェンティレスキのナポリ時代を考える上で本質的な論点ではあるので、今後、考察を深めていってもらいたい点である。とはいえ本論文は、これまで研究上の関心の薄かった後期の画業に対する一貫した関心と、いくつかの明確な新知見を提供した点で、アルテミジア研究に対する有効な貢献として十分な評価に値するものといえる。